

第3図 河川跡出土銅鏡写真及び土器実測図

岡山宗像市)や天白磐座遺跡(静岡県浜松市)などでしか認められない、貴重なものです。

◎玉類

勾玉は2点(長さ2.6cmと3.2cm)見つかりました。白玉と呼ばれる小さなビーズのような玉も多数出土しました。玉は本来、装身具(アクセサリ)として用いられましたが、祭祀の道具としても盛んに用いられたようです。

◎有孔円板(径2.7cm 厚さ2mm 中央の2つの孔径は各1mm)

滑石製と推測される石製模造品です。中央に2つの孔をあけた扁平な円板で、銅鏡を簡略化し模造したものと推測されています。5世紀を中心に、祭祀遺跡や古墳から多く出土しています。

◎ミニチュア土器

ミニチュア土器は、大きさが約4~5cmで、手づくねにより製作されています。出土数は当研究会第40次調査と合すると100点以上を数えます。ミニチュア土器類は、これまでの調査例から祭祀に用いられた土器と考えられます。

■まとめ

- ① 古墳時代前期後半の河川跡において、ミニチュア土器類を中心とした土師器とともに、保存状態の良い鏡、鉄銚、鹿角装刀剣類などの金属製品、玉類が出土し、水辺で行われた祭祀の様子が明らかになりました。
- ② 古墳時代の祭祀遺構において、ミニチュア土器とともに鏡、刀剣類、玉類が揃って出土したのは、大阪府下では初めてで、全国的にも極めて貴重な事例であることが明らかになりました。
- ③ 以上のことから、上記のような遺物を用いて祭祀を行うことのできた有力者と、有力者を輩出した集落が小阪合遺跡に存在した可能性が高くなりました。

—八尾市若草町 所在—  
 こざか あい  
**小阪合遺跡第41次調査**  
 現地説明会資料

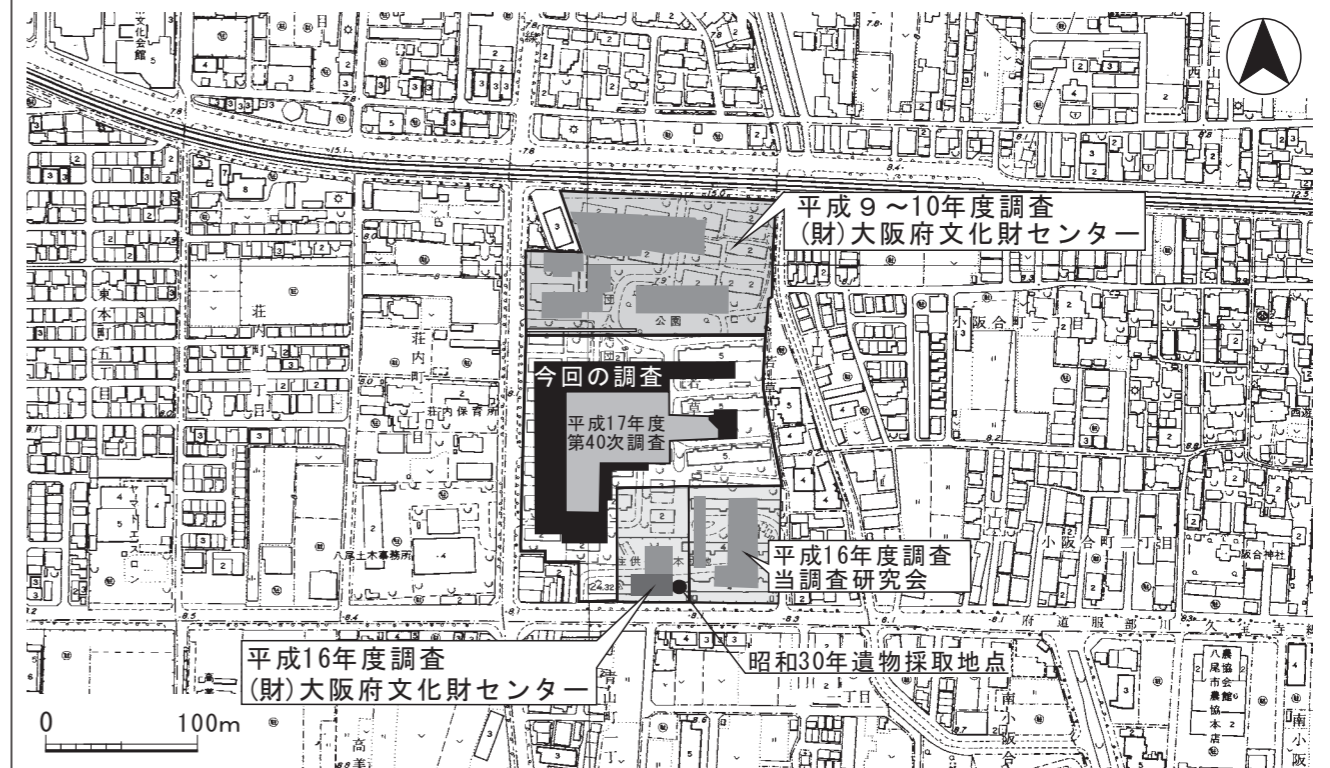
財団法人 八尾市文化財調査研究会  
 平成19年6月30日(土)

1. はじめに

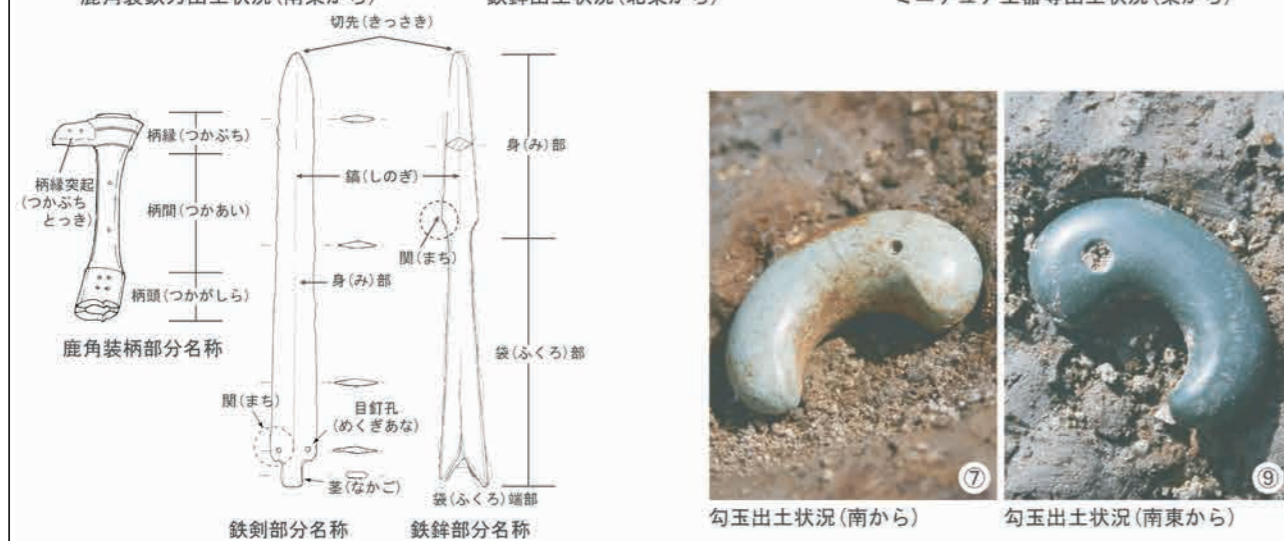
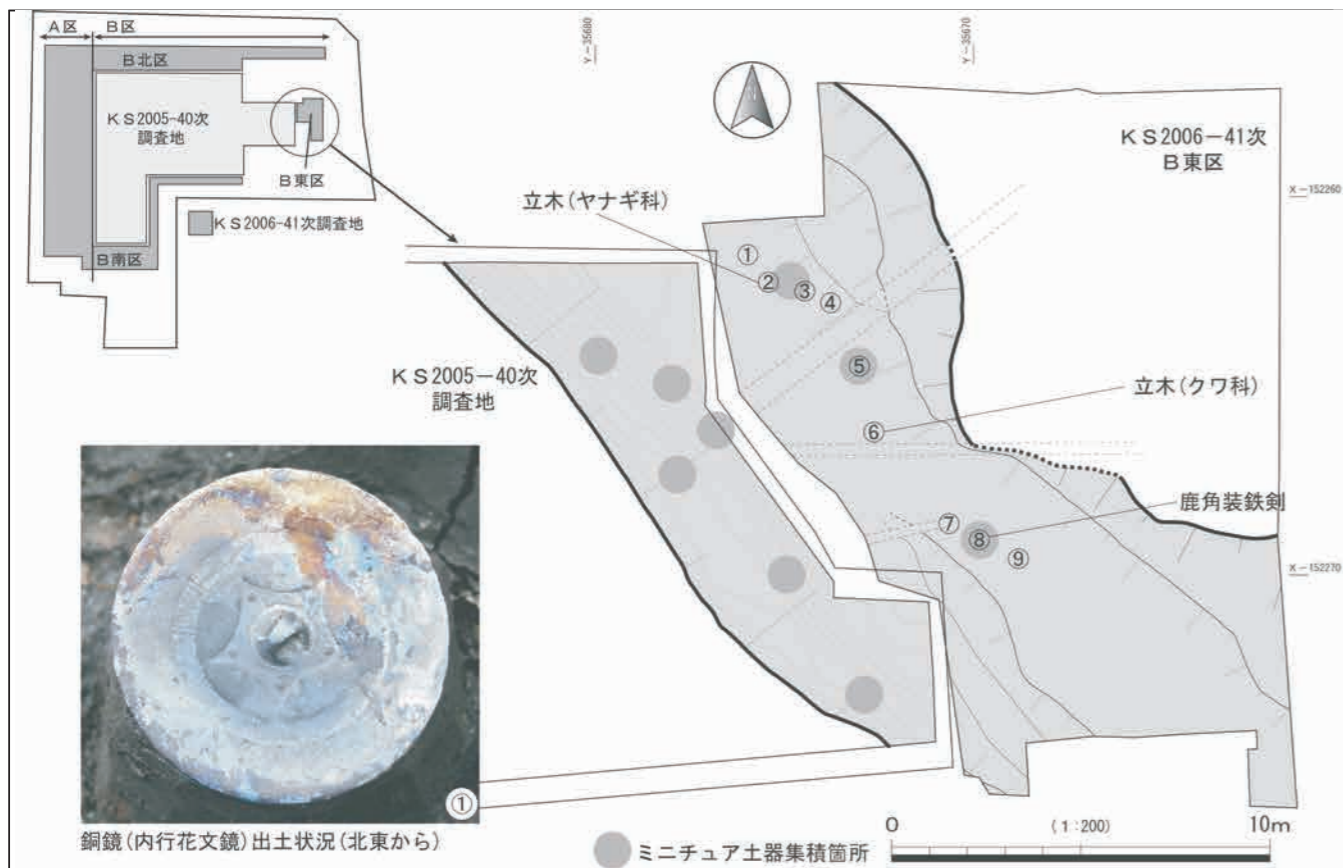
八尾市のほぼ中央に位置する小阪合遺跡は、旧大和川の主流である長瀬川や玉串川などの河川により形成された沖積地上に立地しています。当遺跡は、昭和30年に今回の調査地の南側(第1図●印)で実施された大阪府営住宅建設工事中に、弥生~鎌倉時代の土器類が多量に出土したことが発見の契機です。その後、大阪府教育委員会、八尾市教育委員会、(財)大阪府文化財センター、当研究会によって多次にわたる調査が行われてきました。その結果、弥生時代中期~近世に至る遺跡であることが分かりました。

今回の調査地周辺を見ると、北側では、平成9~10年度にかけて大阪府文化財センターによる調査が、また当調査地内では、当研究会が平成17年度に第40次調査を行っています(第1図)。両調査では、弥生~鎌倉時代の遺構・遺物が多数見つかりました。特に奈良~平安時代にかけての河川跡からは、和同開珎をはじめとする皇朝十二銭が98枚のほか、墨書土器、瓦、石製品、獣骨などが出土しました。

今回の調査は、当研究会第40次調査同様、病院建設に先立って実施しており、調査面積は約5,326㎡を測ります(第1図黒色部分)。調査の結果、古墳時代初頭~中世にかけての遺構・遺物が多数見つかり、現在も調査は継続中です。



第1図 調査地と周辺図 (S = 1/5000)



第2図 古墳時代前期後半の河川跡 平面図及び遺物出土状況写真

## 2. 調査の成果

### 【奈良～平安時代】

調査地の西部では、過去の調査で見つかった奈良～平安時代の河川跡の続きが検出されました。今回の調査で奈良～平安時代に铸造された皇朝十二銭が新たに12枚出土し、過去の調査で出土したものを合すると110枚を数えます。大阪府下において、皇朝十二銭がこれだけ多量に見つかった例は今回が初めてです。

### 【古墳時代中期】

調査地の南部では、土師器、須恵器、獣骨、石製紡錘車などの遺物が多量に投げ捨てられた、大きな土坑が見つかりました。何らかの祭祀が行われた可能性が考えられます。

### 【古墳時代初頭～前期】

調査地の南部では、土坑や複数の溝が検出されました。溝からは、捨てられたと思われる壺、甕、高杯、鉢などの多量の土器群が出土しました。土器群のなかには東部瀬戸内地域や山陰地域で作られたものが含まれており、他地域との交流のあったことが明らかになりました。

### 《河川跡》

東端に位置する調査区において、古墳時代前期後半(4世紀後半)の河川跡が見つかりました。この河川跡は、当研究会第40次調査で見つかった河川跡の東斜面にあたります。この河川跡には、水の流がほとんどなかったことを示す泥が溜まっていたことから、池や沼のような地形であったことがわかりました。その規模は、長さ約25m、幅約11m、深さ約1mを測ります。

この河川跡の東斜面上からは、手づくね成形によるミニチュア土器をはじめ、壺・甕・高杯を中心とする多量の土器類のほか、小型銅鏡(内行花文鏡)1点、鹿角装鉄剣1点、鹿角装鉄刀1点、鉄銚1点、鉄斧1点などの金属製品、石製模造品(有孔円板)1点、勾玉・管玉・白玉などの玉類が出土しました。遺物群の出土状況からは、河川跡の東斜面上に生えていた2本の木(ヤナギ科・クワ科)の周囲において、鏡や刀剣類、玉類、土器類を組み合わせた祭祀が行われたことが考えられます。

### 《河川跡出土の特筆すべき出土遺物について》

#### ◎内行花文鏡(径6.9cm・厚さ1mm)

連弧文鏡とも呼ばれ、鏡背に花卉状の連弧文様が5枚と、その外側に櫛歯文様が見えます。中国製鏡を模倣して古墳時代初頭～前期に日本で製作された鏡と思われる。当鏡は、鏡背全体が擦れにより丸みを帯びています。

#### ◎鹿角装刀剣(剣：全長約59cm 刀：全長約30cm)

身の両方に刃をもつ剣が1点と、片方にだけ刃をもつ刀が1点出土しました。ともに、柄の部分には鹿の角の分岐部を用いており、このうち鉄剣の柄表面には直弧文と呼ばれる幾何学的な文様も見えます。古墳時代前期後半の鹿角装刀剣類は、近畿地方の出土例の中で最古級に位置づけられます。

#### ◎鉄銚(全長32.4cm)

遺存状態の良い鉄銚が1点出土しました。鉄銚は弥生時代から使用される長い柄のついた刺突用の武器です。古墳時代の鉄銚は、古墳からの出土が知られますが、祭祀遺構からの出土は、沖ノ島(福